

# 論点

2017  
衆院選

## 民進、小池新党へ合流

衆院が28日に解散され、10月10日公示・22日投開票の総選挙へ各党が走り出した。小池百合子東京都知事率いる新党「希望の党」への合流を民進党（前原誠司代表）が決め、野党再編が本格化。自民党の安倍晋三首相（総裁）と、非自民勢力を結集した小池氏の対決構図が固まった。日本の政治はどこに向かうのか。

### 非自民勢力の流れ

1990年代初めに日本新党や、自民党を離党した小沢一郎氏らの新生党などが生まれ、93年に非自民の細川護熙連立政権が誕生した。94年、細川政権に関わった政党が新進党を結党。一方、96年に新党さきがけ、社会民主党の議員らによる民主党ができ、98年には前年に解党した新進党の大半が合流。2003年に民主党と自由党が合併し、09年に民主党政権が発足したが、12年衆院選で惨敗し下野。16年に民主党と維新の党が合流し民進党となった。

## 江田 五月

元参院議長



えだ・さつき

1941年岡山県生まれ。東京大法卒。東京地裁判事補などを経て、77年の参院選で初当選、その後衆参各院で当選4回。参院議長、法相、環境相などを歴任。昨年、政界を引退した。—徳野仁子撮影

昨年夏に政界を引退するまで、足かけ40年間、国政に関わってきた。大きく二つの段階に分かれると思っている。1977年の参院初当選からの20年は、自民党1党支配が続いた55年体制を变えるため、「政権担当ができる政党を何とかして作る」ことが目標だった。そうした政党ができる前に政権交代が起きた。93年に誕生した細川護熙政権だ。8党派が連立した非自民政権だったが、中心となる政党が育っていなかったので、長続きしなかった。「ちゃんとした代替政党がないと、勢いだけで政権交代してもダメだ」と骨身に染みた。

自民党政権に戻った後、96年に旧民主党が誕生し、それからの20年は「政権交代を実現すること」が目標となった。98年に新民主党になり、2009年にはついに政権交代が実現し、鳩山由紀夫政権が誕生した。あいにく3年余りで終わり、再び自民党に戻ってしまったが、政権交代ができるだけの力がある第2党が何とかできたのではないかと思っている。これが第2段階で、私自身がかわったのはここまだった。

この次にやってくるのは、「本格的な政権交代が日常的にできる状態になること」だ。自民党にいつでも代わり得る第2党が常に存在している時代。今回の民進党と

## 2大政党「産みの苦しみ」

「希望の党」の合流は、まさにその第3段階が始まる門口に立った時の「産みの苦しみ」だろう。出産するまでには苦しみがある。この数カ月、政界にはいろいろな動きがあった。動きがあるのは当然のこと、小さな初期微動が続くと、やがては大きな地殻変動につながる可能性がある。

「希望の党」と、92年に細川氏が結成した日本新党の類似性を指摘する声があるが、今回の野党再編に先立っては、民主党（現・民進党）による政権担当の経験がある。その経験なしに生まれた日本新党の時とは状況が異なる。民進党の「解体」によってリベラル勢力の居場所が難しくなるように見えるだろうが、現在の日本に私たちが若かった時のような革命主義を唱える人はいない。左派というほどの左派でもなく、全体として大きな違いはない。

今後、小池百合子東京都知事がどういう行動に出るか。「希望の党」の代表として政権選択選挙を戦うようになれば、「安倍晋三首相対小池知事」というトップリーダーを選挙区制になる。小池知事がトップにふさわしいかどうか。渡り鳥の雁の集団は先頭を飛ばす鳥が疲れると、先頭が入れ替わりながら全体としてはまとまって飛ぶ。小池知事の今の役割は「まず先頭を飛ばす」ところにあるのだろう。

そもそも小選挙区制は2大政党による政権選択ができる選挙を目指したものだ。単なる人気取りやタレントを選ぶような判断ではなく、懐の深い視点で政権を選ぶ国民の力量が問われる。戦後一貫して政権を担当してきた自民党が現状維持型とすれば、「希望の党」は未来志向型だろう。二つの党は政策のベクトルが異なる。そろそろ未来に向けたベクトルが出てきているのではないか。いつでも政権選択ができる政党にしてほしいし、国民もうまく育ててほしい。